

千葉市の戦跡を巡る



特定非営利活動法人「郷土ちばに学び親しむ会」 理事 **西野 則一**

NPO法人「郷土ちばに学び親しむ会」は、千葉市及び近隣市民と明日を担う子どもたちが郷土ちばについて学び、親しめるような機会を提供し、郷土ちばへの理解と愛着が深められるようにするという目的で、千葉市内の社会科を専門とする現役・退職教師が集まり、2011年（平23）から①児童・

生徒部（子どもたちの郷土への興味関心を持つ社会科教育の推進）②教師部（若年層の社会科教師育成）③市民部（市民へ郷土ちばの風土や文化歴史を伝達）の3事業を開始した。今回紹介する戦跡巡りは、自治体退職者会千葉県本部・千葉市役所退職者会の要請を受け、市民部が対応した。

1. 軍都千葉市

軍都千葉（千葉市）という言葉がある。千葉県内には帝都防衛の一環としてもともと軍事施設が置かれていた。佐倉の連隊や市川・習志野・四街道などに野戦砲兵の連隊や学校、騎兵旅団の兵営が並んでいたのである。しかし千葉市（当時は千葉町）には軍施設はなかった。

日露戦争後の軍備拡張の中で交通兵旅団の創設



千葉市「考えよう 平和の大切さ」より（2017年）

が決まると当時の加藤久太郎町長が先頭となってこの誘致運動を行い、1907年（明治40）に交通兵旅団司令部、鉄道連隊、材料廠（現千葉経済学園内）の千葉進出が決定した。これ以後千葉町は軍都として様々な施設が置かれた。主なものでも、陸軍歩兵学校、陸軍飛行学校、気球連隊、陸軍戦車学校、陸軍高射学校が設置されていき、全国各地の連隊から幹部候補生達が学びに来て、軍都千葉市が形成されていった。ちなみに、千葉市稲毛区轟町の町名の由来は、「軍靴轟く町」からきている。

10月に実施された、「千葉市の戦跡を巡る」は、鉄道連隊・陸軍歩兵学校・気球連隊の遺構を訪ねた。

2. 鉄道連隊

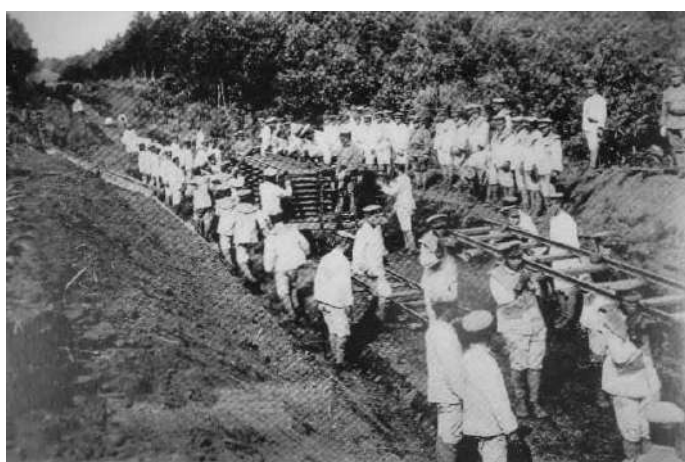
1896年（明治29）東京中野に鉄道大隊が誕生。



綿打池での架橋訓練



千葉公園に残る橋脚



線路の敷設訓練 *軌匡を担ぐ



千葉公園に残るトンネル

1907年に千葉に鉄道連隊として移って来た。日露戦争には中国東北部、第一世界大戦でも、中国、シベリアと出兵した。その後鉄道連隊は増強され1918年（大正7年）には鉄道第一連隊となり、津田沼にあった部隊が第二連隊となった。1911年（明治44）には千葉～津田沼間に、1932年（昭和7）には津田沼～松戸間に演習線が開通し多くの将兵が鉄道実務の訓練を行った。この路線は戦後も跡地として残り軽便道路と呼ばれた。また現在の千葉公園内には訓練に使用された橋梁やトンネルなどが残されている。

① 鉄道連隊の任務

鉄道連隊の主な任務として、戦場の線路破壊箇所等の修繕・運転、鉄道の建設に従事し、武器・弾薬・食料・兵員の輸送を行っていた。また、機関車・装甲車両の修理等にも従事し、時には装甲列車班を編成し敵を迫撃した。

② 鉄道兵の訓練

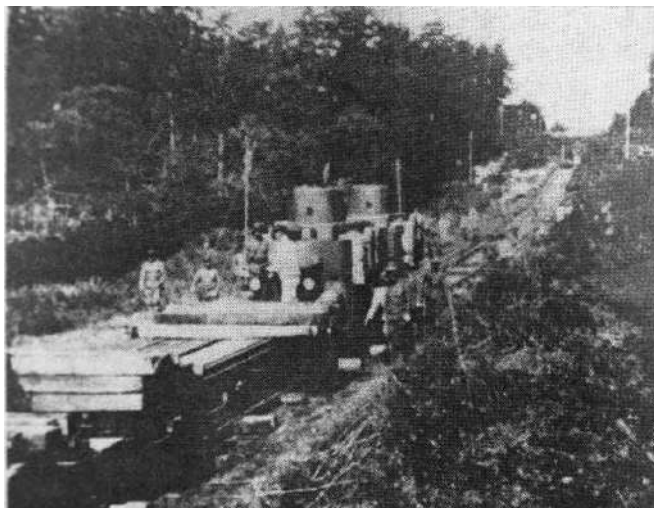
鉄道連隊は、平時で現役兵1,000人～1,300人位で編成され、戦時になると招集兵が加わり、約2倍の2,500人位になった。鉄道兵は技術兵であり、2年間の兵役義務の中で、線路の建設、架橋訓練等を千葉公園内にある綿打池周辺や津田沼までの演習線で実施していた。兵舎は椿森にあった。

*軌匡（ききょう）とよばれる出来上がった線路（5mのレール、8枚の枕木、175kg）を6人1組で次々に敷いていく。

●演習線 千葉～津田沼間約15km（都賀、園生、宮野木、犢橋、津田沼へ、柏井橋梁へのループ線含む）*軌間600mmの軽便鉄道、訓練用の狭軌（1,067mm）、広軌（1,435mm）も敷設されていた。

③ 満州事変と荒木大尉の殉職

1932年（昭和7）前年起きた満州事変により、



九一式広軌牽引車の材料運搬（穴川付近）



戦前の荒木大尉の銅像



演習線跡の園生駅付近から宮野木方面をのぞむ



銅像跡（荒木山）

鉄道第一連隊に所属していた荒木克業中尉は、満州に出征、装甲単車隊（九一式広軌牽引車2両）で大興安嶺隧道付近（満州西部）の偵察に向かった。敵の放つ岩石を載せた突放車を脱線させたが、岩石を受け戦死。熊本県出身25才の若さであった。大尉に昇進し軍神とうたわれた。第一連隊営の通称「ラッパ山」に大尉の銅像が建てられ、一周忌に除幕式が行われたが、戦時中に金属供出された。その後、荒木山と呼ばれている。

④ 鉄道第一連隊材料廠（千葉経済学園内）

材料廠とは、鉄道に関わる作業場の集合体である。ここでは、機関手・検車手養成や材料廠工手の教育が行われていた。機関車の修理・解体・組立てのために旋盤工手、製罐工手、鍛工手、鋳物工手等のほか、電気精密工手、銃工手等、様々な

訓練が実施されていた。この中でも、機関手養成は花形であり、選抜された者が訓練に励んだ。通常機関士の免許は、早くて7、8年かかるが、ここでは1年間で取得しなければならず、寝る間も惜しんで勉強していたそうだ。

⑤ 鉄道連隊の終焉

日中戦争、太平洋戦争の拡大とともに、鉄道連隊は中国大陆やインドシナにも派遣され、敗戦時、鉄道連隊は第二十連隊まで結成された。タイとビルマを結ぶ泰緬（たいめん）鉄道は、第五連隊と第九連隊が建設にあたったが、連合軍捕虜と現地労務者の大量犠牲での完成であり、「死の鉄道建設」と言われる所以である。（死者数45,000人とも）1947年（昭22）8月、第九連隊が佐世保港に上陸、鉄道連隊最後の復員となった。



旧鉄道第一連隊材料廠



材料廠内部



材料廠への引込み線
(軽便線—内側、狭軌線—外側)

3. 陸軍歩兵学校〔1912年〕

歩兵の戦闘法を研究し、これを全軍に普及させる目的で1912年（大正元年）9月陸軍戸山学校内に設立され、重要な使命を遂行する陸軍の教育機関であった。同年11月千葉県都賀村作草部に移転した。

1913年（大正2）3月の終業式には昭和天皇の行幸があり、1918年（大正7）には、皇族も学生として在籍していた。嵯峨侯爵家の浩と結婚した愛新覚羅溥儀（満州国皇帝溥儀の弟）も1937年（昭和12）の半年間、稲毛（現ゆかりの家）から通っていた。

◎ 陸軍歩兵学校の役割

（陸軍歩兵学校案内より—1925年）

全軍歩兵聯隊から将校学生を招集し、歩兵の射撃戦術及び通信術等を習得させ、習得したことを各隊に普及させ、その他に諸学術の調査研究を行い、歩兵教育の進歩を図ることを目的に設立された。歩兵の携帯する各種兵器の研究実験を行う所（歩兵銃、軽機関銃、重機関銃、戦車、種々の器具材料等）でもある。

●学生 甲種学生—歩兵科の大尉

主に射撃戦術を習得

乙種学生—歩兵科の中尉・小尉

主に射撃、通信術を習得

期限—概ね4か月 年2回入校

●組織 学校本部 教育部—学生の教育

研究部—各種の調査

教導隊—教育並び研究実験の実施



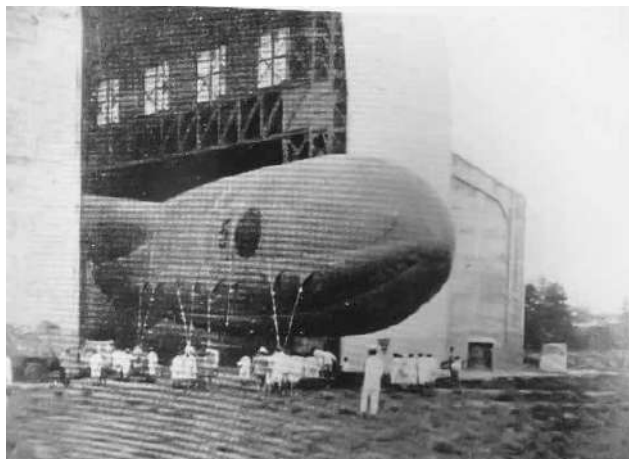
陸軍歩兵学校正門



陸軍歩兵学校跡（作草部公園）

4. 気球連隊

所沢にあった気球隊が1927年（昭和2）に、ここ作草部に移ってきた。はじめ格納庫は1棟であったが、2年後にさらに2棟新しく建設された。1933年（昭和8）格納庫2棟建設そのうち1棟が現在も使用されている川光倉庫（築84年）である。1936年（昭和11）気球連隊となった。気球隊の軍事上の格割は繫留式の気球を上げて戦況を偵察する



第一格納庫から出る繋留気球



旧第二格納庫（現川光倉庫）

とともに砲撃を誘導するものであった。気球は絹羽二重にゴムを染み込ませてつくり、水素ガスを注入する。気球は球体と横長の2種類があり、計4個所有していた（予備2個含む）。

日露戦争では気球隊が活躍し、成功体験のもと連隊として拡大していったが、航空機の発達とともに、時代遅れのものとなっていった。1940年（昭15）5月中国武漢（ウーハン）付近での戦闘が繋留気球を使用した最後の実戦となった。

登戸研究所（俗称）で風船爆弾の本格研究が始まり、陸軍は1942年（昭17）気球兵器の開発を命ずる。それにともない気球連隊は、放球実験という新たな任務につくことになった。

「ふ号」作戦で、純国産兵器の風船爆弾（和紙とこんにゃくのりの直径10mの気球に水素ガス）が完成し、偏西風に乗せて、高度1万mを飛行し約70時間でアメリカ本土に爆弾投下するというものであった。1944年（昭19）11月から45年4月に

かけて、約9300発が、茨城県大津、福島県勿来、千葉県一宮から放球された。アメリカ本土221、カナダ94、アラスカ38でその他を合わせて計361発の発見記録が残っているが、戦果は無いに等しかった。

5. 終わりに

様々な軍事施設を抱えた千葉市は、米軍の標的になり、1945年（昭20）の7月7日の空襲では、市内中心部を始め、鉄道第一連隊（椿森）、気球連隊（作草部）、歩兵学校（天台）は、ほぼ全焼し、市内の死傷者は1,204名を数えた。鉄道第一連隊や第二連隊から次々と新たな連隊が編成され、大陸ばかりでなくアジア各地へと赴いた。マニラで壊滅した第八連隊、泰緬鉄道建設に従事した連隊の中からは、戦犯として処刑された者も出ている。また、鉄道兵は捕虜として1年半も泰緬鉄道のレール撤去作業をさせられている。

戦争というのは、始めてしまえばなかなか終われないということだ。最後は、一億総玉砕という狂気の言葉が当たり前のように語られ、大本営の参謀たちは責任を取らず、死んでいくのは最前線の兵士であり空襲に逃げ惑う国民であった。戦跡巡りの話をいただき、これらのことを調べていくうちに、戦争の悲惨さはもとより、戦争は人間から正しい判断力を奪い、人間が人間でなくなることであり、平和な世界こそが、人間が人間として生きていけることをあらためて思う。

主な参考資料

- 『鉄道兵の生い立ち』 長谷川三郎 1987
- 『実録鉄道連隊』 岡本憲之、山口正人
イカロス出版 2009
- 『写真に見る鉄道連隊』 高木宏之、光人社 2011
- 『陸軍歩兵学校案内』 中島吉三郎 1925
- 『風船爆弾 純国産兵器「ふ号」の記録』
芳野興一 朝日新聞社 2000
- 『実録 戦場にかける橋』 塚本和也 交友社 1981
- 『千葉いまむかし』 千葉市教育委員会 No.3、No.21